# 大韓民国国立公園管理公団北漢山生態探訪研修院との交流事業を通じて

櫛　引　知　弘（長野県警察本部 山岳安全対策課 課長補佐
長野県警察山岳遭難救助隊長）

令和元年６月10日から15日までの６日間、国立登山研修所の交流事業として韓国への視察に派遣させていただいた。メンバーは日本スポーツ振興センターの小菅理事、国立登山研修所の藤原所長、宮田専門職、岐阜県警の川地係長、富山県警の石川主任と本職の６名。メンバー全員が非常に熱心な人たちばかりであり、また、何よりも宮田専門職も含め警察官（山岳救助隊員）３名と共に視察できたことは、非常に有意義な時間であった。

長野県は北アルプスルをはじめ中央、南アルプス、八ヶ岳と日本でも有数の山々を抱え、毎年多くの登山者が長野県に訪れている反面、全国で最も遭難が多く発生している現状にあり、韓国も含め、海外からの登山者も年々増加している。このような状況の中、韓国視察に派遣させていただいたことは、長野県警とっても大きな財産であり、韓国で見聞きしてきたことを確実に引継ぎ、今後の救助、防止対策の両面で生かしていきたいと考えている。

今回は、「登山研修」で視察内容を発表する機会をいただいたので、私の見聞きしてきたことをご紹介する。

## １　韓国の登山事情

まず、初日に訪れた「北漢山生態探訪院」は、登山学校を併設する北漢山国立公園の管理施設である。北漢山は、ソウル駅と繋がっている北漢山駅から徒歩10分程度で登山口に達するほどアクセスが良いため、平日、休日問わず多くの登山者が訪れ、研修期間中も朝早くから本格的な登山の格好をしている人から、公園の散歩のような人まで、様々なスタイルの登山者が多く見受けられた。

また、駅と同施設内の間には、マムートやノースフェイスなどの著名な登山用品店が10数件建ち並んでおり、気軽に登山前でも登山後でも登山用品を購入できる環境にあった。ただ著名な登山用品店の裏には安価な登山用品店も建ち並んでおり、韓国らしいなと感じる一面であった。

同施設の探訪院長との談話では、韓国の登山事情について、

- 登山道は非常に整備されているため、誰でも気軽に登れ、多くの人が登山を愛している反面、チャレンジ精神が旺盛な人も多いため、何の知識もない者がロッククライミングを行い、遭難するという課題もある。
- 登山には食糧とお酒を持っていく人が多く、一昔前は、登頂後にシートを広げ、そこで食事や酒を飲み、そのままゴミを放置し、頂上はゴミだらけの状態であり、毎回、ヘリでゴミを下げていた。しかし、現在、そのような状況がないのは、ゴミを捨てさせない「教育」を徹底したからであり、その教育には10年くらいかかった。

とのことであり、知識のない登山者の遭難が多いのは長野と何ら変わらないと感じるとともに、10年間という長い歳月をかけ登山者の意識を見事に変えたということは非常に感心させられた。

これらの視察を通じて感じたことは、韓国の「登山」は、日常生活の一部として非常に身近なものであり、公園の散歩感覚という人（格好）も多く、日本で言う「登山」とは考え方や捉え方が異なると感じた。また、至る所にかなり大型の登山用品店が建ち並んでいることや、ソウル市内でも登山ブランドのウェアを着ている人が多いことなどを踏まえると、登山そのものも人気であるが、ファッションの一つとしても捉えられていると感じた。

## ２　登山の安全対策

### （１）　施設の視察

２日目に視察を行った「原州本部（災害安全処）」では、2014年から運用を開始した国内全ての国立公園を365日24時間体制で管理しているシステムの紹介があった。

同システムは12面のモニタにより管理されており、

ア　全国の気象情報…異常気象が発生した場合は全国立公園に情報伝達

イ　登山コースの難易度表示…Ａ～Ｅの５段階評価で、月に１回職員が確認

ウ　国立公園内の気温、風、雲の状況確認

エ　安全管理に関する報告書（当直員が毎日作成し表示）

オ　国内の山火事注意情報…時期により評価（乾燥時期は注意評価が高くなる）

カ　山火事発生状況…発生時は赤色等で表示、表示をクリックすると詳細が確認できる

キ　山火事用の防犯カメラ…103箇所設置。初期段階での発見が目的

ク　登山口の防犯カメラ…341箇所設置。行方不明事案等に役立つ

ケ　特別気象情報

コ　海洋を管理する防犯カメラの共有…海に面する国立公園内の不法侵入防止

サ　報道番組

シ　遭難の発生状況

の12種類の内容が表示されている。

同システムにより、異常を感知したり、遭難等を認知した場合は、職員が所持している携帯電話に一斉配信（メール等かは不明）され、最も近い職員が現場対応することとなっている。



**管理システムの状況**

各登山口には、防犯カメラとゲートが設置されており、時間外や異常気象等が発生した場合は遮断しているが、遮断時に侵入者がいた場合、アナウンスで警告することもできる。

登山に関しては、法的にゲートから登山することが決められており、ゲート外から登山した場合は罰金が科せられるそうで、ゲート外から登山する者も希にいるそうである。

２日目の午後に視察した「雪岳山探訪院」は、本年（令和元年）に完成したばかりの施設で、北漢山探訪院に次いで国内２箇所目の登山研修（登山学校）施設であり、同施設は事務所や会議室、食堂等を完備している他、体育館やトレーニングルーム、娯楽室まで完備されていた。

また、訓練員の宿泊施設は、２～３人用の部屋にベッド、テレビ、シャワールーム、トイレのみなら

ず、キッチンまで完備されおり、何日でも快適に研修できそうな施設であった。

同施設では、今後の指導者になる者への教育の他、小学生をはじめとした一般人への登山教室なども実施しているとのことであった。



雪岳山探訪院の宿泊施設等

４日目に視察を行った「雪岳山管理事務所」の管理している雪岳山は、年間3,000万人ほど訪れ、登山者の約20%が外国人であるため、案内板は韓国語以外に日本語、中国語、英語の４言語に対応しており、また、ガイドブックやガイドも同様に４言語で整備されていた。

遭難防止対策として、多くの登山者が安全に登山できるよう登山道の整備には力を入れているとのことで、階段や木道がかなり整備されていた。

また、この山域で最も多い山岳遭難は、ロッククライミングであるため、雪岳山内にある21箇所のクライミングのできる岩場は許可証がなければ立ち入ることができず、無許可の場合は罰則規定もあるとのことであった。

同管理事務所の裏にある登山教育施設は、「登山の学び」と「楽しさ」を重視しているような展示等となっており、入口を入ると、まず登山届の提出やパッキングの仕方まで細かい内容の展示があり、その後、雪岳山のルート紹介のできる立体図が大きく設置されていた。

また、周辺の風景をバーチャルで体験できたり、各山の頂上や広大な景色との合成写真が撮れるコーナーなど、登山は楽しものだと印象づけられるような工夫もされていた。

### （2） 登山による視察

３日目に実際に登った大勝瀑布は、韓国三大瀑布の一つで、韓国の国内でも有名な滝の一つであり、高さは88mあるが、この滝でも年間に数回の遭難が発生している場所である。

長いコースではないものの、非常に急峻な箇所が多いが、ほとんどの場所に階段が設置されており、韓国の登山道の整備状況を確認することができた。この階段があるおかげで、スムーズに登ることはできたが、日本であれば、おそらく長いクサリを補助的に付ける程度であるため、かなりの難所であり、遭難もそれなりに発生しそうな印象のある場所であった。



登山口の状況・カメラ、スピーカ等が設置

５日目に実際に登ったスンニンボンは、クライミングのできる岩場のある山で、北漢山生態探訪院から車で５分の場所に登山口があり、２時間ほどで岩場に行くことができる。



階段の状況



救助隊の常駐施設



装備用の物置



鏡

他の登山道と同様にかなり整備された登山道を上がっていくと、途中に鏡が設置されている。

これは、自分の服装や装備を自らで確認するとともに、疲れた顔をしていないかなどを確認する意味もあるとのことで、非常に良いアイディアだなと感じた。

登山口と岩場の中間付近には救助隊の常駐施設があり、土日休日を中心に国立公園職員が常駐しているとともに、登山道の途中には救助や山火事に備えるためのロープやホースなどの装備が入った物置が設置されており、このような常駐施設や倉庫は各山域にあるとのことで、人員、装備ともに非常に配備が整っていると感じた。

常駐施設には、登山計画書を提出するポストがあり、用途としては、クライミングをする登山者が計画書を提出するものらしいが、この山域は許可山域ではなく、あくまでも任意提出であるため、中身を見たが１名のみの記載であった。しかし、その脇にはしっかりとクライミングルートの書いた看板があり、クライミング人口の多さと徹底した整備が窺えた。なお、クライミングルートは、毎月、国立公園の職員が実際にルートを確認しているとのことであった。

**（３） 安全対策に関する総括**

安全対策に関する視察を行って、最も感じたのは、

- ○ 入山規制と徹底した登山道整備と管理
- ○ 国立公園内への人員配置と定期的な登山道及びクライミングルートの確認
- ○ 集中管理室における気象データや防犯カメラなどによる総合的な管理

など、国が莫大な費用と人員を投入して安全対策を行っていることである。

視察中に国立公園の入口に職員が配置されていたが、特に登山者等への声掛けは行っておらず笑顔で挨拶をしているのみであった。長野県で言えば、登山口に警察官や民間の相談員を配置すれば必ず登山計画書の提出や装備の確認、アドバイスなどを行うので疑問に感じていたが、登山道そのものが確実に管理、整備されているので、そういった指導そのものの必要性がないのだと視察を終えてから理解することができた。

日本の場合は、どちらかというと国立公園内は環境保全などが重視されるため、このような整備をすることはできず、また登山は自己責任で行われるという考え方が一般的であるため、韓国のような対策はできないと思うが、それと同時に、このような環境、考え方で登山をしている韓国の登山者が日本国内で登山する場合、これらのことを踏まえた対策が

必要であると強く感じた。

長野県でも平成25年７月に、中央アルプスで韓国の登山者が低体温症や滑落で４名が亡くなるという大量遭難が発生しており、一緒に登山していた関係者が「登山口での案内表示がなく、登山道にもハシゴなどの補助が少なかった。」との発言をしていたと聞く。これらのことを考えると、遭難防止を行う上で、いかに日本と韓国の登山に対する考え方や登山道の整備状況の違いを伝えていくかということが課題であり、未だに効果的な対策が講じられていないので、この韓国との交流事業を通じて、日本の登山道などの現状や考え方などを伝えていくということが、この交流事業の重要な役割の一つではないかと強く感じた。

**３　救助体制・技術**

**（１）　施設の視察及び救助事例**

２日目の午後に視察に訪れた雪岳山探訪院では、長野、富山、岐阜県警の事例等を発表するとともに、韓国側の事例発表を聞くことができた。

内容としては、夜間の救助活動、断崖絶壁からの救助活動、ヘリを用いた救助活動、アイスクライミングの救助活動など４事例であり、写真と通訳の説明のみであったため、詳細は確認できなかったが、長野県内でもあまりない非常に厳しい救助活動が多いという印象であった。

また、救助の主体は国立公園の特別救助部隊であるが、消防や民間の救助隊とも連携しているようであった。

ただ、パワーポイントのみの確認なので確実ではないが、救助活動中にヘルメットを被っていなかったり、バックアップ（補助ロープ）をとっていないなど、安全性よりもスピードをかなり重視しているという印象もあった。

４日目に視察した「雪岳山消防署」が管轄する雪岳山は、毎年300件近くの遭難が発生する韓国国内で最も遭難の多い山域で、中でも岩場の宙づり救助など、厳しい救助現場が多いため、救助体制は毎日５人で３交代制勤務をしているとのことであった。

救助隊が発足した経緯として、過去に雪崩遭難の捜索中に二重遭難が発生したことや、これまでは救助活動が組織的に行われていなかったことなどを挙げていた。

救助活動で最も多いのが、クライミング中の遭難であり、外国人も年間で20～30人くらい遭難しているが、日本人の遭難はほとんどないようである。また、夜間に遭難するケースが多かったため、数年前から入山の時間規制を行ったことにより、夜間の遭難は減少したと説明をしていた。

最後に装備品を視察させてもらったが、国内で最も遭難の多い場所で救助活動を行っているだけあり、非常に装備品が充実しており、新品同様の装備も多い印象があった。救助が多いので使用頻度が高く頻繁に買い換えているか、または、ある程度の使用回数で買い換えているか、どちらかは分からないものの、装備の充実度を見ると非常に予算面では優遇されているのではないかという印象であった。また、数多くの経験から、工夫された装備などもあり、救助に関する情熱というか、取組姿勢の強さを感じた。



豊富な装備

最終日に視察したペツル社直営のトレーニングセンター「アンナプルナ」では、フランスの本社で指導者講習を受けたインストラクターが配置されており、アジア圏内でここまで設備の整った研修施設は韓国にしかないため中国や台湾から研修にくることもあると説明を受けた。

なお、研修にかかる費用は、４日から５日間で５万円から７万円程であり、きめ細かな指導を行うため、１回の研修は10名ほどに限定しているとのこと。

施設内には座学で講習できる施設と、実技を行うための施設があり、実技施設は、クライミングボードや訓練塔の他にアイスクライミングのトレーニングのできる設備も設置されていた（アイスハンマーが打ち込める特殊な樹脂が設置。）

**（２） 特別救助部隊との合同訓練**

視察３日目、雪岳山探訪院で指導者研修会（約20人の講習生）に参加している隊員への実技講習への参加という形で訓練に参加した。訓練場所は、雪岳山探訪院から車で10分程のところに、約15メートルの岩場があり、クライミングルートも13箇所と、非常に訓練環境に恵まれていると感じた。

指導者は国立公園の特別救助部隊の係長（日本の小隊長クラス）１名と、講師５名（男性３名、女性２名）の計６名であり、係長は実際に数多くの現場経験があり、技術、知識ともに非常に豊富であった。

韓国国内で発生している遭難の多くはロッククライミング中の滑落や疲労などによる行動不能などであるため、今回の訓練は岩場で宙づり状態になった遭難者の救助方法を中心に行われており、訓練前半は、チロリアンブリッジによる救助方法であったが、スタティックロープ１本でシステムを構築する方法で、当県では実施したことのない救助方法であった。

実際の救助活動でもこのような方法でやっているのか、ロープは何本持っていくのかを質問したところ、この方法が最も多用されており、現場には数本しかロープは持って行かないとの回答であり、高さのある岩場での救助活動が多いため、数本のロープで、何カ所も同じシステムを構築し、どんどんブリッジを張って遭難者を降ろしていくのであろうと想像ができた。

ブリッジの展張は、３分の１の倍力システムで、使用している救助用具はペツル社のＩＤやリグなどが多用されていた。

また、ある程度の訓練を実施した後、エイト環やＡＴＣ、プルージックコードなど限られた装備で、同様のシステムが構築できるか訓練をしており、決して装備のみに頼っているわけではないと感じた。

但し、この訓練に参加して感じたのは、安全管理面である。



訓練場所の岩場の状況



システムの説明をする係長

長野県警では、救助活動の一連の安全対策として、「自己確保」「システムのバックアップ」「最終的な目視、声出しによる安全点検」等を徹底しているが、訓練を見ていても、バックアップ措置を講じることは１回もなく、また、カラビナの安全環の閉め忘れなどは、非常に多く散見された。訓練内容を見ていても、どちらかというとシステムに対することに重きを置いており、安全面に対するコメントや指摘はほとんどなかったと感じた。

訓練後半は、宙吊りになっている遭難者の単独での救助方法であり、橋にある支点から６箇所ロープを垂らし、何度も繰り返し訓練を実施していた。

この救助方法は、主に山岳ガイドが客を救助するために使われる技術で、基本的に単独で行うことを想定しているため、個々のスキルアップの訓練であると感じた。

訓練の最後の方で、韓国の係長から、「山岳にはあまり関係ないが、ハンググライダーなどの墜落事故の救助活動を実施したことがあるか」との質問があったため、立木に引っかかっているような救助はほとんどない旨を回答したところ、立木の枝（支点となり得る太い枝）にロープを引っ掛ける装備とその使い方について実際に装備を使いながら丁寧に説明をしてくれた。また、係長が考案し業者に特注して作らせた装備についても併せて説明をしてくれ、この種の事案は長野県内ではほとんどない事案で、あまり想像したり、考えたこともなかったので、非常に参考になった。

訓練の最後に係長が、昨年の交流事業で訪日したときの感想を述べており、特に、日本は救助活動中の安全管理が徹底されており、韓国も見習わなければならなず、また安全管理が韓国の課題でもある旨の話をしていた。

**（３） 救助体制・技術に関する総括**

実際の救助活動事例や、合同訓練を通じて一番感じたことは、韓国と日本の救助技術の差はほとんどなく、飽くなき探究心と強い情熱を持っている隊員が非常に多かったことである。

講師を務めていた者も非常に若い男女であったが、技術や知識も豊富で、何よりも休憩時間中でも競って懸垂や反復訓練をするなど、やる気に満ちあふれている青年ばかりであった。

しかし、唯一気になったのは、前記した「安全管理面」である。

全ての訓練を確認しているわけではないので、訓練始めに安全管理について徹底しているかもしれないが、やはり訓練でやらないことは、現場でもできないので、システム重視の訓練は、今後の救助活動時の二重遭難に繋がるのではないかと感じさせられた。

以上、思うがままに今回の交流事業について記載させていただいたが、「百聞は一見にしかず」で防止対策にしても、救助活動にしても、想像していたものとだいぶ異なっていたというのが正直な感想であり、そのような点からすると、この交流事業は非常に有意義なものであった。

今の私の立場は、長野県内で発生する遭難を１件でも多く減らし、発生した遭難には、二重遭難を起こすことなく安全かつ迅速、的確に救助することであるので、今回の交流事業で学んだことや、感じたこと、そして見聞きした知識を最大限に生かせるようにしていきたいと考えている。